

## ◆特集 今こそ、脱原発・反原発運動の再強化を

# 「原発事故と因果関係はありません」の言葉に不信感

## 311子ども甲状腺がん裁判 原告3 陳述書要旨より抜粋

夢だった東京での大学生活を謳歌していた私は、大学2年生になる前の春休みに、生理が2週間周期で来るようになり、急激に体重が増え、これまでに経験したことのない肌荒れと体の痛みがひどくなりました。しばらくすると、今度は唾を飲み込む時に何か異物感を感じるようになりました。これまでにない急な体調の変化で不安になった私は、母に相談して福島に戻って、検査を受けました。

1次検査はB判定という結果でした。2次検査で、良性か悪性かを判断するために、穿刺吸引細胞診を受ける必要があると伝えられました。先生が針を刺すと言いつつ、先生が自分の全体重を乗せるように、強い力で喉に深くグイグイと突き刺してきました。そして、私の耳からはメリメリメリつと針が筋肉を通過するような音が聞こえてきました。痛いと思う前に、涙が出てきたことを覚えていきます。

1カ月後、診察室で先生がモニターの紫色の気持ち悪い画像を映し出し、この部分が「甲状腺乳頭がんです」と説明しました。「気になっているかもしれないが、このがんは福島原発事故との因果関係はありません」と先生が付け加えました。母は驚きで全く言葉が出ず、目には涙を浮かべ放心状態なのがわかりました。私は母とは逆に冷静に受け止めていました。がんならば治すしかない。そんな思いでした。そんな気持ちと同時に、「原発事故と因果関係はない」と、こちらから聞いてもないのに言われたことにとっても不信感を抱きました。

大学3年生の夏休みに、手術を受けました。内視鏡手術という傷が目立ちにくい術式です。当時は保険適用外で多額の費用がかかるので一旦は諦めました。しかし、母は花嫁になった時に首の傷を目立つようなことにはなつてほしくないと、内視鏡手術をするように強く進めて

くれ、母が費用を工面してくれました。

### 将来の夢も、親孝行も奪われた

病気になる、経済や手術をして失ったものがたくさんあります。一つは健康な体です。手術を受けてから現在に至るまで、月に一度以上頻繁に風邪をひくようになりました。体を第一に優先して考えるようになり、何事もセーブする癖ができました。

二つ目は、せつかくの内視鏡手術を受けながらも、鎖骨に赤い跡が残ってしまったことがとても残念です。

三つ目は、外来の受診や造影CT検査などで、そのため東京から福島県に帰らなければならず、学業に支障が出たことです。検査の指定された曜日が平日で、授業を欠席しなければなりません。毎回検査に行くために単位を落とさないと気が気ではありませんでした。新幹線代が高くて手が出ません。家族に負担をかけるわけにはいかず、いつも高速バスを使っていました。

さらに、私は大学の奨学金を受けていましたが、学費免除の申込期間と検査期間が被って、気づいた時には申請の締切が過ぎ、結局は3年生の学費を全額支払わざるを得ませんでした。経済的に厳しい状況にあった家族に大きな迷惑をかけてしまいました。

そして、将来の夢も裂かれました。大学卒業後、憧れていた会社に入社できましたが、なぜか採用通知を見た時に純粋な嬉しさはありませんでした。そして、入社以降も月に一度風邪をひき、ストレスなども重なり、次第に風邪が治らなく、気管支炎、喘息、肺炎になり、体調がどんどん悪化していきました。危機感を感じて会社を辞めることにしました。

このように、私は色々なものを失うことで家族を悲しませてしまいました。私の座右の銘は「さすけね」という言葉です。さすけねは「なんとかなるさ」という表現で祖母と母の口癖です。いつもその言葉に勇気づけられていました。私にとっておまじないみたいな言葉です。私はいつも元気に笑顔でいることが最大の親孝行と思ひ、病気によってそれを奪われたことに私は深い悲しみを感じています。こうした思いは、私の訴訟、提訴への思いを強くさせました。さらに、がんと診断された日、「原発事故と因果関係はありません」という言葉が、最後にそうさせました。私たちだけではなく、今後の健康被害に苦しむ子どもたちは増える可能性があります。弱い立場にある子どもたちを見捨てずに、未来のある子どもたちがしっかりと救済され、幸せな人生を生きられる世の中にしてほしいと私は願っています。